

現在の高教市出身で、日本図を作成した江戸時代の学者 長久保赤水(1717~1801年)の顕彰活動や地図を教育に生かす動きが活発化している。功績を伝え続けてきた長久保赤水顕彰会(同市)は設立から30年。この間には関係資料が国の重要文化財に指定され、地図が教科書に掲載されるなど赤水への注目度が増す。さらなる知名度向上に向け、活動が熱を帯びる。(日立社・小原瑛平)

伊能より42年早く

赤水は現在の同市赤浜の農家に生まれ、儒学や天文学、地理学などを学んだ。

「余技」(趣味)だとして

描いた地図は、40歳ごろから20年以上の歳月をかけて

作成。1779年には「改正日本輿地路程全図」(赤水図)の初版を完成させた。



赤水顕彰が活発化 教科書に地図

教科書に地図

天文学を生かし、日本の地図としては初めて経緯線を記載。地図の完成は伊能忠敬より42年早い。赤水図は江戸時代の庶民に広く使われたとみられてい



こうした功績を広く伝えようと、同会は1992年

会員100人を目指す

11月6日、赤水の誕生日に集のフロアであり、現代にも通じる学びがある」と、赤水の魅力についてそれぞれ語る。

17年に関係資料が県指定文化財に加わったのに続き、20年には関係者の悲願だった国の重要文化財に指定された。その後、中学、高校の教科書や参考書に赤水の子孫が保管していた資料の収集なども進めてきた。2012年から会長はさらに加速させ、一時は88人まで減っていた会員も813人にまで増えた。現

在は千人を目指して奮闘中だ。赤水に魅了される点について、顕彰会事務局長の三浦邦明さん(70)は「儒学者でありながら科学的な才能でおりながら科学的な才能育に活用されるよう普及を進める方針だ。上部教授は今夏、高教市内3中学校で出張授業を実施。生徒は赤水図を見ながら、現代の都府県庁所在地に当たる場所を山や川などの位置をヒントに探し

郷土の偉人の功績を伝える佐川春久会長(右から2人目)ら長久保赤水顕彰会の関係者

高教市高教

郷土の宝、全国に発信

11月下旬、市内で授業の報告会を開いた上部教授は「この学習は地理にも歴史リカが教材として使われるようになり、赤水のことが全国に知られば、高教市の町おこしにもつながる」と力を入れ、赤水図を

小中高で活用可能

上部教授は今夏、高教市内3中学校で出張授業を実施。生徒は赤水図を見ながら、現代の都府県庁所在地に当たる場所を山や川などの位置をヒントに探し

茨城新聞

12月26日 月曜日
茨城新聞社
〒310-8686
水戸市笠原町978-25
電話 (029) 239-3001(代)
http://ibarakinews.jp
編集局
電話 (029) 239-3020
FAX (029) 301-0362
読者申し込み先
0120-029-218
(平日午前9時~午後5時)